

【導入】

神様を信じて生きる歩みは、晴れた日のようにいつもすっきりしている時があれば、時には空が見えない曇りの日のように神様が何を考えているかわからない。信じている自分の信仰がわからない。そのような時もあります。

この信仰の歩みというのは、全能の神様が私と向き合ってください方であることを知る歩みです。今朝はヨブの気づきから、そのことを共に覚えていきたいと願います。

【本論】

友人たちと様々な議論を交わして悩みに悩んだヨブに対し、ヨブ記 38 章からは神様がヨブに語りかけられる様子が記されています。神様の創造の御業、摂理の御業を突き付けられたヨブの応答が 42 章 2 節から述べられるのです。「あなたには、すべてができること、あなたは、どんな計画も成し遂げられることを、私は知りました。」

「どんな計画も成し遂げられることを」これは、「あなたのみ旨の成就を妨げることはできない」とも訳せる言葉です。

私たちはこの神様が造られた世界に生かされている者たちです。山も海も、どの生き物も神様が造られた。そして創造の初めから今に至るまで、造られた世界はなおも保たれています。太陽が昇り、日が沈む。地球が自転している。当たり前のようにこれらの動きの中で日々過ごしている私たちですが、その背後には、神様が創られた世界を保ってくださいている事実があります。生きていることが当たり前ではない。神様が造られたこの世界に生かされていることを覚える時、神様の偉大さと、日々の助けに気づかずにはいられません。どれだけ多くの恵みが与えられているか。何気ない日々の歩みの中に、神様の助けと働きがすでにある。そのことにまず目を向けるものでありたいと思います。

さて、ヨブ記を読んでいますと、ヨブの「なぜ自分にこのようなことが起こったのか」という問いに対しては、神様は答えられないことに気づかされます。読者には 1、2 章を通して知らされますが、ヨブは最後まで知らない。そして最後までそのことがヨブには明かされない。

このことを覚える時、私たちはこの地上で起こること、そのすべての意味を知ることにはできないと言えます。なぜこのことが起こったのか。わからないということがある。しかし一方で、不思議なことにヨブが神様の前に納得したのは、起こったことの意味を説明されたからではありませんでした。神様がヨブにご自身をあらわされた。そのことがヨブにこの告白をもたらしたのです。

彼のそれまでの悩みを見ると、神という存在を自分の理解と考えの中で必死にとらえようとしていました。しかしこれが時に、神様を自分の頭の世界という小さな枠の中に知らず知らずのうちに閉じ込めてしまうことになります。私たちも、自分の頭の中で作り上げてしまう神観があるでしょう。善と悪、義と不義、常識と非常識、それらのものの考えから神様はこうだと決めつけてしまう。C.S ルイスは彼の著書『キリスト者の精髓』の中でこのように述べています。

「神に出会う時、わたしたちはあらゆる点でわれわれよりも無限に優越しているものに直面することになる。・・・」

神様を真に知る時、人は自分と神様との間にある圧倒的な差を知ります。自分の高慢な姿に打ちのめされます。しかし、そこで起こる悔い改めは、ただの悲しみで終わることはありません。この偉大なお方がなおも私を心に留めてくださる。私と向き合ってください。神様の愛に抱かれる瞬間でもあります。どんな過ち、罪でさえも赦しの道があることを知るのです。私たちはこのお方が、私たちのためにこの地上に来られた神であることを知っています。私の罪をもその身に負われて、十字架にかかれた方であることを聞いています。神様を知る時、どれだけこのお方が罪深い私を忍耐をもって接し、愛して下さっているか、その事実気づかされるのです。信仰の歩みはまさに、そのことに気づかされていく歩み。

【結論】

ヨブは以前から神様を知る者でしたが、悩みの中でさらに深く神様を知るようになりました。「あなたには、すべてができること、あなたは、どんな計画も成し遂げられることを、私は知りました」このヨブのように私たちは告白できるでしょうか？ヨブのように悩み苦しみのなかであらうとも、このお方に向き合い続けていきたい。目の前で起こっている出来事の意味が今は分からなくても、それも神様の御手の中にある。そのことを心に留め、私たちの現実の中で神様がどのような方かを知り、神様の働きがあることに気づかされ、関係を深めていく一週間でありたいと願います。